

熱の入った美国との対抗陸上・思い出の名選手

古平の名物男？ やぶ長のおじいちゃん、西島のおじいちゃんの一輪車乗りの曲芸が、自転車競走に一段と花を添えた。それはそれは二人でやるアクロバットのショウマン振りには、まさにプロ並みだった。衣装も凝ったビエロ姿だったと記憶している。

また、この頃は陸上競技も盛んで、青年団や各町内会の対抗競技もあったが、特に、美国との大会になるといつもけんか試合になり、ものすごく気合も入って、とにかくメチャクチャに面白かった。

古平町には、当時オリオン倶楽部という陸上競技の倶楽部チームがあった。亡くなった正佐藤正雄さんがキャプテンで、富永さんの砲丸投げ、吉能登さんの槍投げ等々、全道でも入賞可能な選手がたくさんあった。美国では、河崎前局長さんが



キャプテンで、大会では勝ったり負けたりで面白かった。千五百メートル・五千メートルの長距離になると、佐藤正雄さんのペース配分がいつも抜群で、もちろん実力があつたからこそ出来たの

でしょうが、胸のすくようなラストスパートに我を忘れて、ガンガン（石油の一斗缶）をつぶれる程ガンガン叩いて応援したものだ。私はまだ小さかったのもつばら応援の方だったが、大会の終わりに近づくと、いつもまさに乱闘寸前——の険悪な状況になった。

のちに、私達の時代になってからもいろいろな大会があつたが、だんだんとスマートになつて来たように思う。美国との大会はその後もたびたびあつた。私も全古平の選手として、いつも四百メートルではトップを走つたが好成績だつた。

同じ頃、北浜先生が三段跳びで優勝をしたし、佐藤三兄弟の佐藤武弥さん、菅原よっちゃん、佐々木登さん、長距離では後輩の村上豊海さん、工藤勝己さん等々がいたが、長距離では泥の木方面の方が強かった。

話が前後したが、あの有名な南部忠平氏が来町されたのは、先輩の活躍していた時代だったが、若かりし頃の南部氏はすらつとしていて、いかにも走るサラブレッドというような好男子に見えた。

つづく——

練棒船に甲板をつけ改良

練棒船は、保津船（ホツ）や三半船（サンバ）を使うが時化に弱く、折角の練を流失してしまふ。古平町の広谷さんが、保津船に甲板をつけて棒船にしたところ、時化に遭つても被害を受けることがなく、大変結果が良かったという。（昭二五年）しかし、なぜかこの改良棒船？ はその後普及しなかった。

- 古平町農会主催第一回そ菜品評会が開かれる（十七年）
- 二宮金次郎銅像の鉄柵を金属回収により供出（同年）
- 児童がドングリ拾いやイタドリ採取して供出（十九年）
- 余市高等学校古平分校が開設され開校式を行う（二十三年）
- 古平地方競馬大会が中島グラで行われる（同年）
- 戦時中、消防団を改めた警防団が解散する（同年）
- 新地町に古平町公衆浴場が完成する（二十五年）
- 沖村・湯内間のトンネルが貫通する（二十六年）
- 新地町にオリオン座が新築落成する（同年）
- 教育の民主化に伴い教育委員の選挙が行われる（二十七年）
- 古平小学校開校七十七周年記念式、旗行列を行う（同年）
- 底曳禁止区域拡大を求め沿岸漁民大会が開かれる（同年）
- 耐火構造二階建公営住宅十二戸が完成する（二十九年）
- NHKラジオが「古平沖揚音頭」を放送する（三十年）

常会は、ふだん財源確保に演芸会

仕事や家事に追われて集まる者が、月一回集まること

楽しさという程度でしたが、時には「栄養の話」や「常識的な英語」「やさしい電気の話」などを取り上げたりしました。しかし、実際に活動をしてみると財源の無いことが大きな隘路で

得のため、新築したばかりのオリオン座で演芸会を

しましたが、その時のことは忘れることができ

ません。盛り沢山のプログラムもそうですが、熱心な稽古の情景、楽屋の世話や弁当の準備などに働いた陰の力、会券売りの苦勞などを考えますと、このような行事によって、会の団結が一段と強くなったと思います。

季節保育所 開 設

ある時の常会

というところが話題になり、当時としては古平町で画期的ともいえる季節保育所を、すけそ漁期である十一月から三月まで開設することにしました。昭和三十一年末のことです。財源については、一人一日二十円の保育料以外には何の収入も助成も無く、また、保育所運営の知識や経験とて無く、一般の関心もまだ低

戦後の婦人会誕生

みなと婦人会

かたが、今とでずから、今考えると全く無謀な事業だった

しかし、それが大事なことであることを会員皆が認識をしておりました。当然のことですがやがて資金難となり、会員の協力によって、廃品回収や映画会によって資金を得るしかありませんでした。

港会館の大掃除や草取り、冬のたきつけ割りなど一生懸命でした。ある冬の日、ひとりのお子さんが帰って来てないという電話があり驚いて探し廻ったと

ころ、たまたまお父さんが床屋さんに連れて行っていたことがわかり、それを聞いた時は、安心のあまり急に腰の抜けるような気持ちになりました。その後、町営の保育所が出来てそちらに引き継ぐことになりましたが、ここまでやれたのも会員のチームワークと努力があったからだと思っております。

責任と団結

年月がたち、会員の異動もありましたが、毎月の常会は続けられ、輪番制で責任を分かち合いながら、後婦連大会や町内の婦人講座、研修会などに出席したり、その後の報告会、反省会などで学習会をしております。

会員は性格やその環境、年齢の違う人達の集まりですから、意思の疎通を欠き気まぐさいこともあったでしょうが、土地柄とかさっぱりしていること、一人ひとりが責任感を持っていることが、この会の続いてきた理由

- 古平郵便局局舎が新築になり移転する (三十年)
- 副総理石井光次郎が港湾視察のため来町する (三十二年)
- 余市・古平間国道が冬期間も開通、定期船が運休 (同年)
- 厳島神社に設置の吉田一穂歌碑の除幕式を行う (三十三年)
- 国道開通に伴い古平橋が完成し渡橋式を行う (同年)
- 国道、余市・古平間が完成し開通式を行う (同年)
- 沖小学校開校八十周年記念式を行う (三十四年)
- 吉田一穂作詞、古平高等学校校歌が制定される (同年)
- 六志内開拓パイロット地区起工式を行う (三十七年)
- 古平町上水道施設が完成、竣工式を行う (四十年)
- 古平町水産加工業協同組合が設立される (同年)

かもしれません。仕事を分け合い、責任を果たす意欲こそこの会の誇りだと思っております。『みなと婦人会二十年の歩み』より 会長 山口 浪

漁民は漁業の知識がなく

資源を海に捨てている

年々内地からタラ漁に来る漁民が多くなっているのに、北海道の漁民はタラを獲ろうとしな
い。それは、川崎船の使い方を
知らないからである。だから、
漁業組合が費用を出して川崎船
を建造し、内地のタラ漁業者に
給料のほか配当金を出すなどし
て雇い、これに道内の漁民を乗
船させて川崎船の使い方、タラ
漁法に慣れさせたら良い。

また、タラ漁は海難の危険も

網下ろし

網下ろしの祝いはどこの漁
場でもやる。その日の漁夫は
無礼講でかくし芸のありった
けを披露する。そして親方、
船頭、お客さんまで引張り出
して、「ヤットコ、ヤットコ
、ソーレ……」と木遣り（き
やり）のかけ声勇ましく、胴
上げが始まる。この木遣音頭
は鯨場特有のメロディーだ。

鯨場縁起

大きいので、本人や家族を救済
するような方法も考えなければ
ならない。

北海道の漁民は、四大漁業（鯨
・鮭・鱒・昆布）のほかには関
心が無い。近頃はいろいろな漁
業も行われるようになったが、
漁民は勉強の度が少ない。内地
の漁民が進んだ漁具で漁をする
のを習おうともしないで、苦情
をいったり邪魔をして追っ払う
悪い習慣がある。

北海道の周辺には資源が捨てら
れている。漁業の知識を得てこ
れらを漁獲し、利用することが
最も重要なことである。

木遣りが始まると、

「乗った、乗った、大乗りだ
ア」とはしゃぐ。網に鯨が乗
ったという意味で、隣の番屋
から聞こえてくる木遣りに力
が入らぬのを聞くと、
「さつぱり乗らねエなあ。ど
んだばア、あのガバーねエこ
と（意気地のないこと）」
といって、相手をバカにする
のである。

古平町で、土地の人による鯨
漁が行われたのは、どうも明治
三十年以降のようである。
（『北水協会報告』より抄録
昭和二十五年発行）

山下泰裕先生来町講演会

元 柔道世界チャンピオン
オリンピック金メダリスト

古平信金「みつわ会」主催に
よるこの快挙が、ほんとうに実
現したのだ。会員のひとりとし
てただただ感激した。ゼニ、カ
ネで呼べる芸能人とはわけが違
う。この陰には、みつわ会吉野
会長さん、その意をくんで高野
俊和さんの苦勞があったように
ある。

東海大の佐藤前監督さん、東
海大四高の水落監督さんを通し
ての折衝等々。日程についても
ずいぶん苦悩されたと聞してい
る。「この機会にぜひ——」
との熱意と努力により、ついに
開催にこぎつけたのである。

役場吏員中森幸一郎が法務大
臣表彰を受賞する（同年）
■古平小学校校長水野幸徳が教育
功労者として受賞（同年）
■沖村治水砂防ダムが完成、竣
工式を行う（四一年）
■町議会議長松座好雄が死去し
町議会葬を執行する（同年）
■稲倉石鉱業所長石川利雄が藍
綬褒章を受章する（四二年）
■古平スキー連盟が結成される
会長 福井幸平（四八年）

吉野会長さんは、折から水産
加工協の本州方面研修視察旅行
団団長として出張中にもかかわ
らず、講演会に同席し、翌日、
また旅行団に合流したという。
責任感と熱意に敬意を表し、
講演会の成功を祝いたい。
個人として、時間的にも経済
的にも大きな負担をかけたこと
と思う。

今後、話題に残る大きな行事
として、誠心ご尽力いただいた
吉野会長さん、高野さんにお礼
を申し上げます。
（匿名での一文を紹介します）